

地域密着アニメ成功

がいなタイムス

昨年設立、増す存在感



アイデアはバーで生まれる



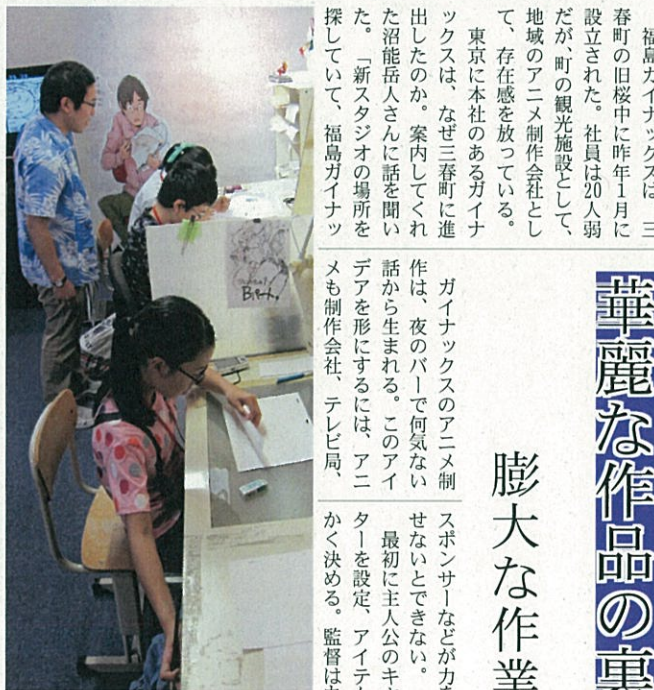
シナリオ会議を再現



展示フィギュアの説明を沼能さん(左端)から受ける私たち



未完成の線画でアフレコ



アニメーターの高木さんの指導で作画体験をする私たち

難しかった作画体験 指導してくれたアニメーター高木祐紀さんは、1ヶ月でもずれたら絵のパラメータが崩れて、書き直しになると言ったので、丁寧に書いた。仕事では、何千枚も書くという。1枚の絵にトレースするだけで20分かかり、とても難しかった。(工藤凜)



私たちが作りました

写真右から
新聞なつみ
(相馬高1年)
工藤 凜
(桜小6年)
角田 博之
(高瀬中2年)

膨大な作業量や制作費 数や時間配分を決め、シナリオ会議で物語を膨らませる。次に、シナリオを物語の世界観を含めてアニメーターに伝え、実際の作画作業に入る。30分のアニメで5千枚ほどの絵を描く。こればかりはまだまだ手作業だ。デジタル化は進んだが、膨大な作業量と時間に追われ、スタッフはへとへとになることがある。アフレコで、声優さんは、殴り書きのような絵に音を入れる。想像力や演技力が

要求される難しい作業に驚いた。アフレコなどの仕上げを経て、テレビ局に納品される。一話ごとに、同様な果てしない作業が続く。テレビ放送でアニメがヒットしても、膨大な制作費を回収できるとは限らない。ガイナックスとは異なり、アニメ業界は、フィギュアやDVDなど関連商品に力を入れている。(角田博之)

社名の由来は 鳥取弁「がいな」

ガイナックスの社名の由来は、鳥取の方で「すごい」「や」「大きい」を意味する「がいな」に、MAXを掛け合わせた造語である。名前の通り「政宗タテニクル」「みはるのハルミーゴ」など、すごい作品を作ってきた。今後の福島ガイナックスについて、商品開発や版權管理を担当する沼能さんは「業界になかった表現を探し、斬新なアニメを作りたい。アニメで福島を元気にしたい」と話した。福島ガイナックスには社名の「がいな」の通り、私たちが楽しませる作品を期待したい。(角田博之)

華麗な作品の裏側に苦勞

クスの浅尾芳宣社長が本県出身という縁で進出が決まった。地元雇用が復興にもつながる」と話す。沼能さんは、桜中の旧校舎を活用し活気が戻ればという思いもあった。スタジオの社員たちも、のどかな風景や旧校舎の変わった建物が気に入っている。

福島ガイナックスの核心は「地域密着」だ。県内の東邦銀行のCMを手掛けるほか、NHKとコラボし被災者の少女を主人公にした「想いのかけら」は好評を博し全国放送もされた。そして、福島ガイナックスの人気作品「政宗タテニクル」は劇中に実在する風景を使用。声優も県内出身者を起用して、その華麗なビジュアルが、全国のアニメ好きの心を掴(つか)んでいる。

地域密着の代名詞といえる「三春のハルミーゴ」は、劇メーションという手法で制作されている。三春町の小中学生が声優を務めており温かみのある作品となっている。ほかにもポスターデザインを手掛けるなど福島ガイナックスと地域の密着は新たな展開を見せている。(新聞なつみ)

福島ガイナックスは、三春町の旧校中に昨年1月に設立された。社員は20人弱だが、町の観光施設として、地域のアニメ制作会社として、存在感を放っている。

東京に本社のあるガイナックスは、なぜ三春町に進出したのか。案内してくれた沼能岳人さんに話を聞いた。「新スタジオの場所を探していて、福島ガイナックス

膨大な作業量や制作費

ガイナックスのアニメ制作は、夜のバーで何気ない話から生まれる。このアイデアを形にするには、アニメ制作会社、テレビ局、スポンサーなどが力を合わせないとできない。最初に主人公のキャラクターを設定、アイテムを細かく決める。監督はカット